

## 【研究ノート】

## 台湾人・彭盛木の生涯

——東亜同文書院第23期卒業生——

愛知大学卒業生（1971年度） 千賀 新三郎

## はじめに——彭盛木の履歴

生年月日：1902（明治35）年3月26日  
 原籍：台湾新竹州苗栗郡三叉庄双草湖  
 東亜同文書院（以下、同文書院）  
 入学前の学歴：1923（大正12）年3月台中  
 州立台中第一中学校卒業  
 同文書院科別：商務科（私費生）  
 入学年月：1923（大正12）年4月30日  
 卒業年月：1927（昭和2）年3月13日

彭  
助  
教  
授

図1 彭盛木

『第32期生卒業記念写真帖』、東亜同  
 文書院、昭和11年3月

## I 彭盛木の死

台湾中央研究院許雪姬氏は、大学史編纂委  
 員会『東亜同文書院大学史——創立八十周年

記念誌——』（滬友会、1982年5月30日）が、

彭盛木（台湾）書院に残り教授として後  
 輩の指導にあたった。戦後まもなく福民  
 病院にて死去。当時汪政権の要人周仏海  
 夫妻から格別世話になったとのこと、夫  
 人（李紫荇）は大陸を離れ台湾へ引き揚  
 げを決意、23期生張其耿、周憲文、い  
 ずれも彭一家の面倒をよくみた由（501頁）

と述べている中の、「戦後まもなく、上海の  
 福民病院で亡くなった」という行について、  
 何を根拠にしているか分からない、と疑問を  
 投げかけている<sup>1</sup>。

上記の疑問について、同文書院（大学）の  
 設立母体である東亜同文会の『事業報告書』  
 を調べていくと、「昭和17年度下半期 自昭和  
 17年10月至昭和18年3月 五、東亜同文書院大  
 学(二)行事摘録」の昭和17年11月6日の項に、

11月6日 一、元東亜同文書院教授にして  
 現南京政府財政部員たりし第23期卒業生  
 彭阿木氏は上海出張滞在中急逝、本日正  
 午樂園殯儀館に於て告別式執行につき花  
 環を供し矢田学長、久保田幹事等会葬す  
 (23頁)

との記述があり、このことから11月6日以前  
 に死亡したと思われる。さらに上海で発行さ

<sup>1</sup> 許雪姬著、杉本史子訳「日本統治期における台湾人の中国での活動—満洲国と汪精衛政権にいた人々を例として」、『中国21』Vol. 36、2012年3月20日、118頁。

れている新聞等で関連情報を探してみると『大陸新報』の11月5～6日の両日に次に引く入棺式（告別式）の新聞広告が掲載されていた（図2）。

父 財政部專員兼中央儲備銀行總裁秘書彭盛木儀敗血症ニテ本月三日午後一時急逝致候此段辱知諸賢ニ御通知申上候

追而來ル六日正十二時上海大西路□□路口樂園殯儀館ニテ入棺式舉行可仕候

民國三十一年十一月四日

男 彭元相

友人總代 周佛海<sup>2</sup>

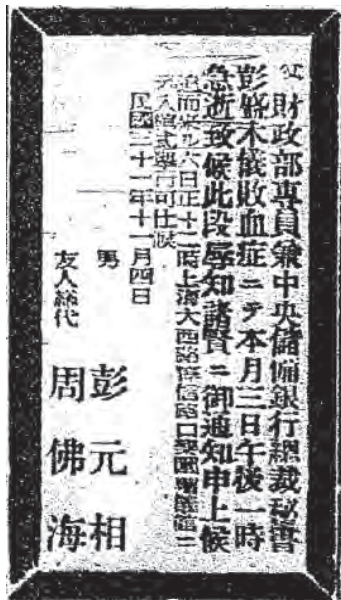


図2 「彭盛木入棺式（告別式）新聞広告」『大陸新報』昭和17年11月5日（第3面）

その他、吳濁流著『夜明け前の台湾——植民地からの告発——』（社会思想社、1972年6月）にも、

上海でその年の11月3日の明治節の祝賀会に、日本側により毒殺されてしまった

（124頁）

との記述もあり、その死亡原因は、一方は「敗血症」で、もう一方は「毒殺」とされており、その死因を特定する事は不可能と思われる。

その他、彭盛木の死については、金雄白著、池田篤紀訳『同生共死の実体——汪兆銘の悲劇——』（時事通信社、1960年12月）に、

民国三十年の冬、…軍統局の潜伏分子であることを探知され彭盛木は逮捕され、…保釈後まもなく急死したが、死因はよくわからない（249～251頁）

とある。また、前掲の許雪姬論文にも、

彭盛木は、中国国民党軍統の特務で、長期にわたり、汪精衛政権と日本との間で結ばれた密約や、それに関わる情報の収集を担当していたことから、日本政府に捕らえられ処刑された。<sup>3</sup>

とある。

彭盛木は、1902（明治35）年3月26日、日本の植民地台湾に生まれた。台中州立台中第一中学校から、1923（大正12）年4月、私費生として同文書院商務科に入学し、1927（昭和2）年3月13日に卒業している。同年4月1日からは母校の講師を委嘱され、教学面では、中華学生部で日本語を教え、研究面では、自分のルーツである客家などの研究を進めていたが、中華学生部の廃止によって、日本語を教える学生を失い、1939（昭和14、民国28）年10月18日、同文書院を退職した。その後、周仏海の日本語通訳、汪精衛政権財政部参事としての仕事、国民党軍事委員会調査統計局（軍統）特務の仕事などをし、1942（昭和17、民国31）

<sup>2</sup> 『大陸新報』昭和17年11月5日 第三面

<sup>3</sup> 許、前掲文、104頁。

11月3日、40歳の若さで、上海で短い一生を終えた。

## II 東亜同文会『事業報告書』の彭盛木

次に年譜形式で彭盛木の一生を見ていきたい。作成に際しては主に東亜同文会『事業報告』を参照した。

1902 (明治35) 年

3月26日 台湾新竹州苗栗郡生まれる。

1923 (大正12) 年

3月 台中州立台中第一中学校卒業 (同文書院に私費生として入学試験合格)

4月14日 第23期生 (114名) 東京集合

4月 相見式 (招見式)

4月21日 東京出発 (名古屋、伊勢神宮、京都、大阪各地を見学)

4月26日 神戸より乗船

4月30日 上海同文書院着院

5月2日 台湾人彭盛木は、内地学生と勉学を開始する。

1926 (昭和元) 年

7月 第4学年生の支那内地修学調査旅行出発 (同文書院第23期生編『黄塵行』、東亜同文書院、昭和2年4月20日)

第4学年生の後半 臨時講師を委嘱され日本語を教授する。

1927 (昭和2) 年

3月13日 第23期卒業式 (卒業生85名)

4月1日 東亜同文書院講師を委嘱される。担当科目は日本語。

6~7月 坂本義孝 (同文書院第1期卒業生) 中華学生部長と中華学生部学生 (10名) 日本見学旅行を引率する。

1928 (昭和3) 年

7月1日~8月15日 支那研究部の研究旅行で広東省梅県地方へ、「客家の研究」の為にいく。『昭和3年下半期事業報告書』に助教授の肩書、担当科目中華学生部日本語とある。

12月 支那研究部講演会で「客家に就て」と題して講演する。

1930 (昭和5) 年

5月19日 近衛文磨一行 (大内暢三、一宮房次郎、横矢囑託) の民国当局表敬訪問、中山陵訪問に従う。

9月1日 中華学生部制度改組に伴い「中華学生部」の名称を廃止する。在籍学生は日本人の書院本科に編入し、成績表は教頭に、学籍簿は学生監に交付される。

1931 (昭和6) 年

1月19日 午後3時より、賀川豊彦講演「唯物的経済史観」<sup>4</sup>。彭盛木は「唯心的経済史観」として中国語に訳す。<sup>5</sup>

5月 支那研究部講演会で「中国家庭生活及其改革問題」と題して講演

7月10日 支那研究部の研究旅行で福建、広東両省へ、「語学、文学及社会事情」資料蒐集の為に出発する。

1932 (昭和7 民国21) 年

1月28日 第一次上海事変勃発

2~4月 同文書院、戦火を避け上海から長崎へ一時避難

4月18日 同文書院、上海復帰

4月29日 上海「新公園」での天長節祝賀会場において、爆弾の破片を受けて耳を負傷する<sup>6</sup>。『昭和7年上半期事業報告書』

<sup>4</sup> 1931年3月退職予定であった坂本義孝教授はキリスト教徒であり、これと著名なキリスト教運動家賀川豊彦の東亜同文書院での講演は何かしら関連があると考えられる。

<sup>5</sup> 立命館大学教授金丸裕一氏所蔵『上海青年』第31巻第9期 (1931年3月4日) による。

<sup>6</sup> 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史——創立八十周年記念誌——』滙友会、1982年5月30日、555

(東亜同文会)によると、彭助教授以外の日本語担当教員がいなくなる。なお、昭和7年度学期期間は上海事変の影響を受けて新年度の開始時期が通常の4月から遅れ、第1学期が5月20日～11月20日、第2学期が11月21日～翌年3月31日となった。

5月19日 中華学生を日本学生部に編入

8月 中華学生部校舎を物産館に、寄宿舎を職員住宅にする改築工事が始まる。

11月17日 職員住宅工事完了

### 1933 (昭和8) 年

4月6日 助教授彭盛木の支那研究部事務主任兼務委嘱が解かれる。同日、支那研究部勤務兼務を委嘱される。『昭和8年下半期事業報告書』(東亜同文会)では、彭盛木の教務分担が空欄である。

### 1934 (昭和9) 年

3月4日 第30期卒業式。最後の中華学生部学生4名が卒業し、「東亜同文書院附設中華学生部」が消滅する。『昭和9年上半期事業報告書』(東亜同文会)では、彭盛木の教務分担が空欄である。

5月1日 助教授彭盛木、支那研究部勤務を委嘱される。

6月26日 助教授彭盛木、中国人留学生の現状調査のために20日間の東京出張を命じられる。『昭和9年下半期事業報告書』(東亜同文会)では、助教授彭盛木の教務分担が空欄である。

### 1935 (昭和10) 年

3月22日 支那研究部講演会で「上海の人力車問題に就て」と題して講演する。『昭和10年上半期事業報告書』(東亜同文会)では、彭盛木の教務分担が空欄となっている。

6月3日 午前9時より坂本一郎教授と共に

光華大学創立十週年紀年祝典に参列し、記念として銀製楯(「道光徳華」の文字を刻む)を寄贈する。

6月22日 午後2時より光華大学第10回卒業式出席。『昭和10年下半期事業報告書』(東亜同文会)、『昭和11年上半期事業報告書』(東亜同文会)、『昭和11年下半期事業報告書』(東亜同文会)では、彭盛木の教務分担が空欄である。

### 1937 (昭和12) 年

3月18日 午後3時半より上海滬江大学国際関係研究会員男女約20名来院し、久重福三郎幹事と共に応待する。『昭和12年上半期事業報告書』では、彭盛木の学業及業務分担が空欄となっている。

4月6日 午後4時より王一亭、程滄、李國杰等数名来院し、大内暢三院長、久保田正三幹事、小竹文夫教授、久重福三郎教授等応待、夕食を共にし、彭盛木助教授は通訳を担当する。

4月27日 午前10時より浙江省教育研究会視察団男女16名が上海市政府社会局の紹介により来院する。久重福三郎幹事代理、彭盛木助教授の案内で柔剣道の予習を見学した後、午前11時まで院内を参観する。

5月26日 午前9時より第37回同文書院開院記念式挙行される。彭盛木、勤続10年の表彰を受ける。

8月13日 第二次上海事変勃発

8月26日 支那派遣軍司令部嘱託を委嘱

9月8日 同文書院助教授職のまま軍司令部附高級嘱託を委嘱される。軍嘱託期間は同文書院の俸給を支給されず。『昭和12年下半期、昭和13年上半期事業報告書』(東亜同文会)では、彭盛木は休職と記載されている。

10月18日 同文書院、上海から長崎へ移り仮校舎で開院式

11月3日 同文書院虹橋路校舍焼失

1938 (昭和13) 年

4月17日 同文書院、上海復帰。交通大学校舎の臨時使用許可を得て、徐家匯海格路校舎として授業を再開する。

下半期 彭盛木、書院に復帰。『昭和13年下半期事業報告書』(東亜同文会)では、彭盛木の職員業務分担が「学生調査大旅行指導」とされている。

11月1日 第2学期始まる。軍事教練実施決定。『昭和14年上半期事業報告書』(東亜同文会)によれば、従来、支那研究部が行っていた大旅行に関する学生指導業務を新たに設置する「学生調査大旅行指導室」(主任小竹文夫教授、彭盛木助教授、事務主任寺田事務員)に移管する。

1939 (昭和14) 年

6月27日 支那研究部講演会で「事変雑感」と題して講演(同文書院での最後の講演となる)。『昭和14年上、下半期事業報告書』(東亜同文会)に助教授彭盛木の記載なし。

1939 (昭和14) 年

10月18日 同文書院を退職する<sup>7</sup>。

### III 『周仏海日記』とこの間の彭盛木

蔡徳金編、村田忠禧他共訳『周仏海日記1937-1945』(みすず書房、1992年2月10日)で、彭盛木の名前が出てくる箇所は、9カ所(179、186、188、189、357、420、436、479、481頁)である。

民国29 (1940 昭和15) 年

3月29日「わが方は余と覚生、盛木で、四千万借款条約に調印した。〔略〕(注) 彭盛木。軍統の特務。上海同文書院教授を経

歴。当時は周仏海の日本語通訳、偽財政部参事」(179頁)

3月30日 汪精衛政権成立

4月15日 「汝祥、盛木が上田を連れて来た」(186頁)

4月20日 「盛木が来て、明日の阿部大使〔駐中国(南京)特命全権大使〕出迎えの日程を報告する」(188頁)

4月24日 「ついで素民、盛木が来て、平井と協議した結果」(189頁)

7月5日～8月31日 「日中国交調整会議」が南京で開催され、正式会議が16回、非公式会議が30回開催される。

8月31日 双方の交渉委員が発表され、中国側の秘書局には馮攸(外交部総務司長、同文書院第22期)、彭盛木(財政部参事、同文書院第23期)の2人、日本側の秘書局は清水董三(大使館書記官、同文書院第12期)と、同文書院卒業生3人が会議に出席した。

11月30日 南京で汪精衛院長と阿部信行大使が、「日本国中華民国間基本関係に関する条約」他に調印する。

民国30 (1941 昭和16) 年

6月14日～7月7日 汪精衛国民政府主席一行日本訪問。周仏海行政院副院長兼財政部長の日本語通訳として彭盛木財政部参事も随員団(14名)の一員として同行する。「外務省作成文書?」に彭盛木の日本語の程度が「上手 ウマイ」と、エンピツ書きのメモあり。

6月23日 近衛首相と汪主席の「日華共同聲明」発表

7月4日 日本外交協会主催の周仏海招待茶会。来賓、国民政府財政部参事(簡任三級)彭盛木、駐日華特命全権大使褚民誼、

<sup>7</sup> 『創立四拾週年 東亜同文書院記念誌』、東亜同文書院、1940年6月5日、156ノ2頁。

駐日華横浜総領事馮攸等が招かれる<sup>8</sup>。

7月5日 周仏海は留学した京都帝国大学で講演をし、彭盛木が通訳をする。

7月7日 「彭参事に名刺を持たせて、大阪市長、府知事及び商会長を答礼訪問させる〔略〕(注) 彭参事 偽財政部参事彭盛木」(357頁)

神戸港から周仏海一行が帰国する船に、日高公使、青木顧問、清水董三大使館書記官らも同行して南京へ帰任する。

10月31日 「李士群が藍衣社上海区を摘発した経過の報告に来る。〔略〕(注) この月、汪派調査統計部は国民党中央軍事調査統計局上海区の地下組織を破壊・捕獲し、区長陳恭澍以下百余人を逮捕した」(393頁)<sup>9</sup>

民国31 (1942 昭和17) 年

1月15日 「彭盛木らの供述を読み、感慨を覚えざるを得ない。〔略〕(注) 彭盛木らとは、彭盛木、程克祥、彭寿の三人。彭盛木は元偽財政部参事で、周仏海の日本語通訳。〔略〕三人とも国民党が派遣した軍統特務で、当時、偽特工総部に発覚され逮捕された」(420頁)

3月22日 「胡蘭成、樊仲雲、彭盛木及び福田顧問らを接見し、個別に相談する。〔略〕(注) 彭盛木らが偽特工総部に逮捕された後、周仏海財政部長は楊愷華(財政部総務司長 妻の弟)を保証人として派遣した為釈放され、彭盛木らは元の職務に復帰した」(436頁)<sup>10</sup>

8月23日 「許江、邵以力、彭盛木を個別に

接見し、統税局の事務調査を指示する。

〔略〕(注) 彭盛木 当時、偽財政部専員」(479頁)

8月30日 「彭盛木が来て、昨日の統税局の調査状況を報告する」(481頁)

この日以降、『周仏海日記』から彭盛木の名前は完全に消え、再び登場することはなかった。

1942 (昭和17 民国31) 年

11月3日 彭盛木は、40歳の若さで、上海の地で短い一生を終えた。

#### IV 彭盛木著作 単著

彭盛木訳補『支那経済記事解説(附) 金融商業用語』、東亜同文書院支那研究部、昭和9年5月30日、昭和10年8月1日改訂再版<sup>11</sup>

#### 論文

主として同文書院支那研究部紀要『支那研究』<sup>12</sup>など同文書院刊行物誌上に発表したものを収録した。

「上海の売笑婦」(『支那研究』第18号、昭和3年12月30日)

「南方旅行所感——客家ニ就テ——」(『華語月刊』)(筆者未見)

「客家に就いての研究」(『支那研究』第21号、

<sup>8</sup> 『外交時報』第889号、昭和16年7月15日号。

<sup>9</sup> 「上海テロ団総検挙(藍衣社上海区壊滅)」(『外交時報』第889号、昭和16年12月15日号)、「上海テロ団全く壊滅」(『支那時報』第36巻第1号、1942年1月1日)

<sup>10</sup> 「財政部参事 彭盛木免職」(「国民政府令」民国31年6月5日、『国民政府公報』第340号、民国31年6月10日)、「任命 彭盛木 財政部簡任専員」(「国民政府指令」第382号、民国31年7月4日、『国民政府公報』第353号、民国31年7月10日)

<sup>11</sup> 原著は楊蔭溥著『経済新聞読法』

<sup>12</sup> 彭盛木は『支那研究』の発行者名義人を第23号(昭和5年7月30日)から第33号(昭和9年3月30日)まで務めている。

昭和5年1月15日)<sup>13</sup>  
 「上海の一考察（社会悪に就きて）」（『支那研究』第21号、昭和5年1月15日）  
 「客家の研究（続）」（『支那研究』第23号、昭和5年7月30日）  
 「客家歇後語に就て」（『支那研究』第30号、昭和8年4月5日）  
 「上海の人力車問題」（『支那研究』第37号、昭和10年6月28日）<sup>14</sup>  
 徐蔚南（講演）、彭盛木（通訳）「上海の発展」抄録（『支那研究』第44号、昭和12年3月13日）  
 賀川豊彦（講演）、彭盛木訳「唯物的経済史観」（中国語題：唯心的経済史観）（『上海青年』第31巻第9期、昭和6年3月4日）

## おわりに

本稿によって、台湾中央研究院許雪姬氏が疑問を投げかけていた大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史——創立八十周年記念誌——』（滬友会、1982年5月30日）の彭盛木に関する記述の不正確さを正す事が出来たと思えます。

同文書院生の中でも特異な経歴を歩んだ彭盛木の事績を、今後もより詳しく調査し、さらに詳細な年譜を編んでいきたい。

彭盛木は、植民地・台湾に生まれ、笈を背負って祖先の地である憧れの中国大陸に活躍の場を求めて渡り、同文書院で学んで教員となりました。しかし、同文書院での教員生活は「中華学生部」の廃止によって退職を余儀なくされています。その後、何の関係もなかった周仏海に日本語の能力を大いに買われて日本語通訳に採用され、中華民国国民政府（汪精衛政権）成立後は、周仏海の財政部長就任とともに財政部参事に任命されました。

「日中国交調整会議」や「汪精衛主席一行

の訪日」での周部長の通訳としての仕事の合間に、同じ同文書院卒業生の外交官清水董三との間で、“彭盛木の日本語、清水董三の中国語”で種々の雑談が交わされたのではないかと想像します。

一方、国民党軍事委員会調査統計局（軍統）の特務として、日本との間での様々な極秘情報を蔣介石政権側に通報していたために、日本軍に監視されるような危険な状況に陥り、ついに昭和17年11月3日、上海の地で40歳の若さで無念の死を遂げたのです。

謝辞 彭盛木の年譜を作成するにあたり、元愛知大学東亜同文書院大学記念センター長藤田佳久先生（愛知大学名誉教授）、同じく愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員石田卓生氏（愛知大学等非常勤講師）から所蔵図書の間覧、資料の提供など様々なご援助を頂き感謝申し上げます。

<sup>13</sup> 本文に「昨夏院命により広東省梅県へ客家の研究について隻身旅途についた〔略〕余が祖先墳墓之地〔略〕余は客家の生まれである」（82頁）とあることから、彭盛木が客家出身であることがわかる。

<sup>14</sup> 東亜同文書院支那研究部講演例会講演（昭和10年3月22日）の講演録である。